

ドS御曹司の花嫁候補

「なんでっ!？」

たった今届いたメールを見た山田華子は、ぐわっと身を乗り出してノートパソコンに齧り付いた。牛乳瓶の底を切り取って付けたかのような分厚いレンズが、画面にぶつかって擦れるが、そんなことは気にしていられない。

「山田さん、また駄目だったのかい？」

回転椅子に座ったまま勢いよく振り返ると、白衣を羽織った中年男性が背後で眉を下げている。彼の名前は畠山。この研究室の所長だ。

尊敬する教授の下で、大学院に残ってポスドクとして研究ばかりしていたら、知らぬ間に二十七歳になっており、「頼むから就職してくれ」と親に泣かれて困っていた研究馬鹿の華子を採用してくれた、仏様のようなお人である。

ここは大手化粧品メーカー、赤坂堂の本社敷地内の一角にある「美容科学研究所」。赤坂堂が国内外に販売しているあらゆる化粧品を、原料から研究、開発。その安全性を確認しているところである。

この美容科学研究所には、畠山所長をはじめ十五人の研究員がいるのだが、華子を除いて全員が男性だ。華子の入社前には女性研究員もいたらしいが、寿退社したり、産休育休に入ったりした結果、現在のように猛烈な偏りが生じてしまっているのだそうだ。

華子は、赤坂堂の心臓部ともいえるこの美容科学研究所で、美白の有効成分を含んだ化粧水の開発に二年携わってきた。臨床結果も揃い、効果効能もばっちり。保湿を超えた超保水性。今回、厚生労働省から認可が下りたばかりの医薬部外品の新規有効成分、「次世代型ハイドロキノン α 」が肌の深層部まで染み渡り、シミそばかすといった、もう既にできてしまったお肌の敵を、分解排泄どころか徹底漂白。加齢による肌のくすみも除去してくれるという夢の化粧水の開発——これが華子の初仕事だ。

美の追求者なら老若男女問わず、誰もが欲しがるであろう代物を作り上げたのだが、商品開発部から、それを認めないという連絡がメールできた。そもそも、作れと指示を出してきたのは商品開発部のほうなのに。

保湿力があって、美白効果があって、浸透力が高くて、いい匂いで、付け心地もよくて、安全性も高くて、ぶっちゃけ他社に負けない化粧水。理想を詰め込みすぎで、無茶としか言いようのない代物だったが、それが上からの指示で成果を期待されていると思っただからこそ、華子はコツコツ地道に研究してきたのだ。なのによく出来上がったら、今度はやっぱりいらなときたものだから納得いかない。納得いかなすぎて、プレゼン資料を作り直して再提出したくらいだ。だがそれも、こうして突き返されてしまったわけだが。

「信じられません。この化粧水を商品化しないなんて。次世代型ハイドロキノン α ちゃんは最高なんですよ!? そのよさがわからないなんて、商品開発部には馬と鹿しかいないのでしょうか? 至急、動物園に引き取っていただきたいものです」

華子が真顔で毒を——いや、真つ当な主張をしていると、襟が伸びきったTシャツに穴のあいたジーンズを身につけた男性が、インスタントコーヒーの入ったビーカーにお湯を注ぎながら、畠山所長の後ろから顔を出した。櫛を入れていないボサボサの頭で、とても勤務中には見えない格好をしているが、彼は華子の同僚の阿久津で、れっきとした美容科学研究所の研究員である。

「こうなると、あの噂は本当なのかもしれませんなあ」

「噂、ですか?」

華子が続きを促すと、阿久津はその独特な話し方を更に早口にした。

「小生が聞いたところによりますと、経営サイドが委託に乗り気らしいのですよ。既に、いくつかのメーカーとコンタクトを取っているとかいいたか」

「え? 委託するのですか!？」

華子は思わず椅子から腰を浮かせた。

百貨店に並ぶ有名メーカーの商品とやたらとそっくりな——そう、成分までもそっくりな発化粧品が、ドラッグストアやコンビニに安価で並んでいることがある。なんのことはない。研究から開発製造まで請け負った委託先が、パッケージを変えただけのそっくりものを作っているのだ。もちろん、そういう契約をはじめから交わしているのだから違法ではない。発注側は、諸々を委託

に丸投げすることによって、開発費も製造コストも抑えられるというメリットがあるから、最近はそのような商品が増えているのだ。

だが、そんなことをされたら、今ある研究所はどうなる？ 縮小され、華子達研究員はリストラ対象になる可能性も出てくることに――

「そんな……。わたしは納得しかねます」

華子が露骨に肩を落とすと、阿久津はずずつと音を立ててビーカーのコーヒーを啜った。そんな彼の横で、所長が顎をさすりながら難しい顔をしている。

「まあ、僕のところに正式な話としては来ていないが、そういう噂はあるにはあるようだねえ」

「これも時代の流れでありましょうな。ま、小生は研究ができればどこでもいいであります。また大学に戻る手もありますし、転職も。そうそう、海外の選択肢もありますな」

「それはそうですけれど……」

知は力だ。研究一本で実績を積み上げてきた研究員は、それこそ職人のようなもの。国内で転職が適わなくても、海外へ行けば引く手あまただ。それに海外のほうが待遇がよかつたりするので、語学力にそれなりに自信があれば、阿久津のように海外勤務を視野に入れる人間もいるだろう。

「でもそれでは、次世代型ハイドロキノンαちゃんはなかつたことになるじゃありませんか！」

「まあ、それは仕方ないであります。新しいものを作っても世に出ないことなんて、商業ではザラにありますですよ。山田女史も洗礼を受けたと思つて。ねえ、所長？」

阿久津は所長に同意を求めるように目配せする。

「そうだねえ……。こればっかりはねえ……。利益が上がるかどうかを判断するのは上であつて僕らじゃないからねえ。従うのみだねえ」

「……………」

瓶底丸眼鏡が自分の表情をわかりにくくしていることを知りながら、華子はムムツと眉を寄せた。なにが洗礼だ。

所長も阿久津も、最初から諦めている。彼らも過去に散々辛酸を舐めさせられてきたということなのだろう。その経験が、彼らを牙の抜かれた獣のように従順にさせているのか。言わんとしていることはわかるのだが、散々苦労してやり遂げた自分の初仕事で、日の目を見ぬまま葬り去られるのはやはり納得できない。だつて自信作なのだ。効果も効能も間違いなくある。売り出せば、喜ぶ人がきつとたくさんいる。

しかし、赤坂堂が製品化してくれないなら、よそで――というわけにはいかない。華子が仮に転職したとしても、転職先でこの化粧水と同じものを勝手に作るなんてことはできないのだ。就業規則で「特許を受ける権利」は会社に帰属することになっている。つまり、華子が開発した有効成分は赤坂堂のものであつて、華子のものではないのだ。

「山田さん、まあ、そう気を落とさずに。委託の話だつて噂だ。ただの噂。山田さんの作った有効成分も、今後別の形で使うこともあるかもしれないじゃないか。まったく無駄じゃないよ」

確かに所長が言うように、クリームだつたり乳液だつたり、フェイスマスクだつたりと、形を変えて別の商品として出せるかもしれない。だがそれは、研究所が存続していればの話だ。製造だけ

でなく、開発さえも委託することになって研究所がなくなってしまったら？　もうそこで終わりのだ。

（でも、委託の話がまだ本決まりでないのなら……説得の余地はあるかもしれません）

華子は唇を引き結ぶと、先ほど不愉快なメールを受信してくれたノートパソコンに向き直った。

「もう一度、次世代型ハイドロキノンαちゃんのプレゼン資料を書き直してみます。わたしの書き方が悪かったのかもかもしれませんから」

そう言いながら、前のめりになって怒濤の勢いでキーボードを叩く。

「まあ……あまり根を詰めないようにね」

「はい！」

一瞬だけ所長を振り返り、またパソコンに向かう。今めいっばい足掻かなくては、後悔する気がするから。

結局華子は、その日のうちにプレゼン資料を商品開発部に再提出した。前回より詳しく作ったプレゼン資料は気合いが入りすぎて、五十ページを超えてしまったくらいだ。商品開発部の担当者に分厚い資料を叩きつけながら、自らの知力の結晶である次世代型ハイドロキノンαの効果効能をおおいに語ってきた。相手は引き攣った顔をしていたようだが、まあ大丈夫だろう。華子の熱意と、次世代型ハイドロキノンαの素晴らしさが、今度こそ伝わったと信じたい。

「お疲れ様です。お先に失礼します」

「お疲れ様」

十八時の定時になって席を立つ。すると、顕微鏡を覗いていた所長がわざわざ顔を上げた。

「山田さん、来週からはこっちの実験データを取るのを手伝ってくれないかな」

「……はい。かしこまりました。……では」

所長の言葉に素直に頷く。「落ちた企画にいつまでもしがみつくな」と言われているようで——いや、実際遠回しにそう言われているのだろう——かなり切ない。それでも所長は、研究馬鹿の華子の気が紛れるように配慮してくれているのだと思う。

（はあ……世の中厳しいですねえ。ああ、可哀想な次世代型ハイドロキノンαちゃん……なんとかしたい。わたしが尊敬する教授なら、次世代型ハイドロキノンαちゃんの素晴らしさを一瞬で理解してください。わたしが尊敬する教授なら、次世代型ハイドロキノンαちゃんの素晴らしさを一瞬で理解してください。わたしが尊敬する教授なら……）

華子は胸の内のため息をついて、自分ひとりしか使う者のいない女性更衣室に入った。

ロッカーからA4サイズのトートバッグを出して、中のスマートフォンをチェックする。どうやらメッセージアプリの通知が来ているようだ。

（お母さんからだ。なんででしょう？）

あまり頻繁に連絡を寄越すタイプではない母親である。急用だろうか、急いでメッセージアプリを開いた。

『お誕生日おめでとう』

短いメッセージを見て、一瞬きよんとしてしまふ。が、更衣室のカレンダーの日付けを見て、そうかと合点がいった。

四月三十日——今日は、華子の二十九歳の誕生日である。

(あら)。すっかり忘れていました)

家族以外に祝ってくれる人もなし、前の誕生日からいつの間にか一年が経っていたという区切り以上の感慨もない日であるが、祝われればそれなりに嬉しい気持ちにはなる。

白衣とスプリングコートを取り替えてロッカーに鍵を掛けた華子は、更衣室から出ながらスマートフォンでメッセージを入力した。

『ありがとうございます』と——』

メッセージを送って、スマートフォンをジーンズのお尻ポケットに無造作に押し込む。と、そのとき、ポケットの中でスマートフォンが震えた。母親からの電話だ。華子は、研究所の玄関に向かつて歩きながら電話に出た。

「もしもし、ハナ？ お仕事は終わったの？」

「はいです。ちょうど今から帰るところです」

おっとりとした声に頷きながら答える。母親は「お疲れ様」と付け加えてくれた。

「じゃあ、改めて。お誕生日おめでとうございます。もう二十九歳ね」

「ありがとうございますです。実はすっかり忘れてまして。えへへ……」

自分でも驚いてしまう。実感なんてまるでないのだから怖い。華子の精神年齢なんて、大学生の頃から変わっちゃいないのだ。すると、電話の向こうから小さなため息が聞こえた気がした。

「ねえ、ハナ。いつまでお仕事するの？」

「そうですねえ、今の社会保障制度を思うに、定年後もしばらくは働いたほうがいいかなと」

自分の考えをそのまま述べると、また電話の向こうから小さなため息が聞こえる。二回目なので、気のせいということはなさそうだ。

「お母さんの言い方が悪かったわ。今のは、もう二十九歳になってしまったけれど、そろそろ結婚も考えないとあとがないわよ。ギリギリよ！ ピンチよ！ 誰かいい人はいないの!?」という意味よ」

「ああ、結婚適齢期の女性がしばし体験するという、親族からの結婚の催促というやつですね」

他社の化粧品研究のために購読している女性誌にときたま書いてあるので、あらゆる面に疎い華子も言い直されればすぐにわかった。

「残念ながら、そのような殿方はいないのが現状です、はい」

「ああもう……この子は……はあ……」

「へい、ごめんなさい……」

三度目になる母親のため息に、ちよつと申し訳なくなる。華子は昔から、お勉強の成績はすこぶるいいのだが、大学で高分子化学を専攻してからというものの、研究にのめり込んで他のことにリソースを割くことを、豆粒米粒どころかミジンコ大ほどもしてこなかったのだ。高分子化学の知識は、現在手がけている化粧品原料開発に役立っているわけだけ……

「お仕事もいいけど、そろそろ将来のことも本気で考えてちょうだい。お母さん、心配よ。お母さん達がいなくなっても、あなたがずっとひとりじゃないかって……。言いたくないけど、あな

たつてば抜けてるし、頼りないし、友達すらいらないじゃない。多少強引かもしれないけど、結婚でもしなきゃずつとひとりよ？」

「うっ……」

痛いところを突かれて言葉に詰まる。研究馬鹿の華子には、同性の友達というのがまずくない。もちろん、異性もだ。学生時代の同級生や、先輩後輩といった知り合いはたくさんいるが、あくまで知り合いだ。まったく親しくない。学会で会ったときに、論文の検討や、研究の進み具合などの話はしても、プライベートとなると皆無である。

誕生日に——しかも花金の就業後になんの予定もない。帰って食べて寝るだけ。おまけに誕生日を祝ってくれるのも親しかいないとすれば、これまでの人付き合いがいかの間違っていたかを実感させられる。そんな娘は、親から見れば絶えずやきもきさせられて、頼りない存在なのだろう。

「お母さんはね、ハナをひとりしておくのが心配なの。だってあなた、研究に夢中になると、ご飯を食べるのも忘れちゃうじゃない。それで倒れるんだから！ そんなんじゃ駄目よ。頼れる人が側にいたら、そういうこともなくなるでしょ」

実は華子には、研究に夢中になると、食べることも飲むことも忘れてしまうという悪癖がある。

酷いときには、自分で作った料理の存在を忘れて、論文や粧業界のメルマガ、ニュースサイトを読みふけり、そのまま食わずに放置して腐らせ、挙げ句の果てには倒れるのだ。集中を通り越して夢中になると、周りの声も耳に入らなくなる。食事の時間というのは非常に無駄が多く感じられて、華子は職場の机の引き出しにブドウ糖入りゼリー飲料を箱でストックしており、食べるのが面倒く

さいときはそれを飲んでいくくらいである。そんな食生活が身体にいいわけではないことも、華子自身一応はわかっているわけだ。

「た、確かに……。体調管理してもらえると非常に助かりますね」

華子が同意したことに気をよくしたのか、母親の声のトーンが明るくなった。

「ね？ それにあなたは頭もいいし、なによりすごく可愛いんだから！ 本気で探せば、お相手なんかあつという間に見つかるわ」

「ええ？ それはちよつというか、だいぶ言いきすぎでは？」

「そんなことあるもんですか。ハナは自慢の娘よ。……ちよつと変わってるけど」

「最後のそれは、本当に言わなくちゃいけないことだったんでしょか、マイ・マザー？」と喉まで出掛かって、ぐつと呑み込む。自分が変わっているという自覚はあるのだ、一応。

「じゃあ、考えてみてね。おやすみなさい」

「はい、おやすみなさい」

電話を切った華子は、ちようどとまっていたエレベーターに乗って一階のボタンを押した。

振り返れば、ずつと研究ばかりしてきた。大学で専攻した高分子化学は、化学や繊維、医療や電子産業、果ては航空宇宙分野まで、幅広い領域で活かされる技術だ。高分子が人類の発展に必要な資材となった今、研究に終わりなどない。

華子の母親はおっとりとした専業主婦で、父親は開業医。こちらも温和な人で、華子が高分子化学に傾倒することに理解もある。そんな両親を、研究に没頭するあまり『頼むからちゃんど就職し

てくれ』と泣かせたのは華子だ。ポスドクの給料は年々右肩下がり。いつまで経っても大学から離れず、ポスドクになったと思ったら、薄給の上に家のことはなにもしないパラサイト娘。いくら理解ある親でも泣きたくなるのは当然だ。

華子は大学院を出て、赤坂堂の美容科学研究所に就職すると同時に独り暮らしをはじめたものの、結局、研究三昧の日々に戻っている。まあ、ポスドク時代に比べると、給料はすこぶるいいのだが。今度は『いい加減にちゃん、と結婚してくれ』と親を泣かせてしまうのも時間の問題だろう。さすがにそれは本意だ。

(結婚……うーん……結婚、か……)

まったく考えたこともなかったので、正直唸ることしかできない。だが、母親の言う通り、結婚でもしなければ一生ひとりなのは間違いないだろう。自分の性格上、ずっとひとりであることに抵抗はないし、親が泣くのを除いて別に困りもしない。じゃあ、結婚しない主義かというところまでこのわりはない。結局華子は、研究ができればそれでいいのだ。

つまり、研究を続けても文句を言わない人が相手なら、結婚するのもやぶさかではないわけ。むしろ、研究以外の私生活の部分を支えてもらえたら――

(そう考えると、結婚はあり寄りのありですね。いいかもしれない。でも、男の人の知り合いはいるにはいますが全然親しくありません……。日常的に会う男の人って、職場にしかないんですよえ)

つい先ほどまで一緒にいた所長をはじめとする、研究所の面々を思い浮かべてみる。

所長は既婚者なので対象外。他にも何人か既婚者がいた気もするが、今まで一度もそういう対象として見たことがなかったので確かなことはわからない。彼女持ちかすらも不明な有様なのだ。

相手の容姿や仕事、年収は気にしないから、フリーで、年はそう華子と変わらなくて、華子の仕事に理解があり、理系の話がそれなりに通じて、家事もひと通りこなしてくれる男の人がいい。

(男の人、男の人、誰か男の人――)

男のことばかり考えていると、エレベーター内に設置された大きな姿見がふと視界に入った。そこに映る自分を見て、なんとも言えない気持ちになる。

(それにしてもお母さん……わたしを可愛いっていうのはちょっと……)

コートの下は、白のTシャツにジーンズ。黒髪ストレートのひつつめに、顔には大きな瓶底丸眼鏡。おまけにすっぱい。持ち物は生成りのしよぼいトートバッグだ。女らしさなんかまるでない。正直なところ、ピーカーでコーヒーを飲んでいた研究員の阿久津とそう変わらない格好をしている。これを可愛いというのは、親の鼻屑目というものだ。

清潔であれば見栄えなどどうでもいいという人間が、美容研究をしている様はなんとも言えない滑稽さがあるのかもしれないが、それはそれ。これはこれである。

華子が男性同僚達をそういう対象として見たことがないのと同様に、実験一筋でできた男性同僚達の理系脳味噌が、毎日毎日同じ格好で出勤してくる華子をそういう対象として認識するはずもなく、華子は研究所の紅一点でありながらも、チャホヤどころか、女扱いされることもなく日々を過ごしてきたわけだ。それが気楽でもあったわけだが――

(職場で結婚のお相手を探すのは効率が悪い気がしますね)

既に華子に対象外のラベリングをしているであろう相手の意識を変えるのは、非常に困難だ。それに、男性同僚ひとりひとりに、「わたしは結婚しても研究を続けたいのですが、あなたの結婚対象になりますか？」とか「わたしの私生活も含めて支えてくれますか？」なんて聞いて回ったら、確実にヤバイ奴認定されてしまう。今後の仕事にも悪影響を及ぼしかねない。

もつと効率的に相手を見つけることができたなら――

(そう言えば駅前に、結婚相談所がありましたね。えーっと、なんとかコネクト！)

毎日利用する最寄り駅のビルに、結婚相談所の大きな看板があったこと思い出す。

煽り文句は「最先端AIマッチングシステムが、あなたを想い、助け、寄り添ってくれるベストパートナーをご紹介します」。

AIシステムは最近、至るところに導入されて、成果を上げていていると聞く。なにより最先端なのがよい。好奇心がそそられる。

第一に、恋人いない歴〓年齢の自分が、自力で結婚相手を探すなんてできるはずがない。そんなことができるのなら、この二十九年の中でもう運命の出会いくらいとつくに果たしているはずだ。自力で出会える範囲などたかが知れているのだから、最新の科学の力に頼ったほうがいい出会いができるかもしれないか。

そもそも華子は、人を好きになったことがない。恋なんて、脳内麻薬のドーパミンがドバドバと馬鹿みたいに出て、セロトニンによる制御が効かなくなった一種の錯乱状態に過ぎない。人はその

状態に、愛だの恋だのと詩的な名前をつけているのだ。つまり、「恋は盲目」や、「あばたもえくぼ」も全部脳内麻薬のせい。自分が錯乱状態になるなんて、ちょっと耐えられない！ 華子がしたいのは、恋愛ではなく、結婚なのだ。

(うん！ 手っ取り早く結婚相談所に相談することにしましょう！ 我ながらナイスです！)

華子はスマートフォンを取り出すと、記憶に残っていた煽り文句を頼りに、その結婚相談所を検索した。見つけたぞ。『ブタリエコネット』。

どうやら、平日の今日は二十時まで開いているらしい。

(早速登録しに行きましょう！)

一階に着いてエレベーターを降りた華子は、思い立ったが吉日とばかりに『ブタリエコネット』の店舗に向かった。



カチカチッ。快適な温度に設定された部屋に、マウスをダブルクリックする音が小さく響く。ノートパソコンの画面に表示されたグラフを見ながら、赤坂透真は口の端をニヤリと上げた。

(お。予想通り売り上げが上がってきたな。やっぱりサンプル配布プロモーションは、無料より有料に限る。対して、オフィス街で配ったサンプルのほうは、ほぼ購入に結びついてない。あー、もうこれ次からやめるように言おう。これならドラッグストアで配ったほうが、三倍はリターンがあ

るわ)

新規の顧客一人あたりを獲得するコストをプログラムに計算させながら、顧客の購入実態を探っていく。特に売り上げのいい商品とプロモーションをマークして、透真は顎を軽くさすった。

ここは大手化粧品メーカー、赤坂堂の本社ビルの一室だ。洗練されたデザインワークデスクと応接セット、そして歴代社長の出版物が並ぶ本棚の横には、美はつくれる“という社訓が額に入れて掲げられている。ひとりには広いこの部屋を、透真は使うことを許されていた。

透真は、赤坂堂の十五代目社長の息子だ。今はまだ執行役員だが、チーフ・ストラテジー・オフィサーいわゆるCSOとして、市場への商品供給計画や物流、品質の改革から戦略立案に関わっている。将来的にはもちろん、社長の座に君臨することが約束されている——と言いたいだが、そこは株式会社。総会で一定の支持がなければ、いかに直系とはいえ会社のトップに立つことはできない。そのために誰にも有無を言わせぬ結果を残すべく、戦略を練る日々だ。

他の業界と比べて化粧品業界は、メーカーごとの好不調はあっても、バブル崩壊後も安定した伸び率を誇ってきた。要因は多々あるが、第一に、化粧品自体が経済の影響を受けにくいということが言えるだろう。多くの女性にとって、化粧品は必需品だ。不景気になれば女性が働きに出るから化粧品を使う機会が増え、その結果、低価格化粧品が売れる。いわゆる、プチプラコスメだ。収入が減った女性が商品ランクを落とすことはあっても、化粧品をまったく使わなくなることはない。反対に好景気になれば女性の収入が増え、今度は高級化粧品が売れるようになる。自分の髪や肌にかける金額が増えるのだ。

女性が美を追求する以上、そのサイクルが崩れることはない。価格や販売方法、プロモーションといったユーザーに対するアプローチは、数字になって返ってくる。数字が上がらないということは、他社との客の取り合いに負けたということだ。

(この俺が絶対に業界トップを取ってやる)

人体の運動理論に基づいて設計された高機能ワークチェアに身体を預けた透真は、伸びをするようにリクライニングした。くるっと椅子を半回転させ窓の外を見つめる。もう五月も終わりにさしかかり、会社の敷地内にある木々の新緑が清々しい。未来を感じさせる力強さがある。これから夏にかけて、化粧品の販売合戦は熾烈を極めることになる。

透真は仕事が好きだ。

赤坂堂は現在、化粧品業界で国内シェアナンバー2の座に甘んじている。これを国内シェアナンバー1にすることが透真の夢だ。そしてゆくゆくは、海外へ販路を広げたい。

化粧品のメインは、メイクアップと基礎化粧品だ。メイクアップに関しては、ファンデーションはA社、口紅はB社というふうに、複数のブランドを使ったり、季節によって使用するものを変えたりする女性が多い。特に今は、あらゆる年齢層でプチプラコスメの利用率がアップしている。

その一方で、化粧水や乳液といった基礎化粧品は、長年同じブランドを使い続けるケースがほとんどだ。ブランドチェンジが起こりにくいということは、一度気に入ってもらえれば継続購入が見込めるが、逆に言えば、他メーカーからシェアを奪うのは簡単ではないということでもある。

しかし売り上げで美味しいのは、基礎化粧品のほうなのだ。基礎化粧品の購入合計金額は、メイ

クアップ用品の二倍になるといふ現実がある。

つまり基礎化粧品 シェアを拡大することが、赤坂堂が業界ナンバー1になる近道であることはまず間違いない。

「——足りないんだよなあ……なにかこう、決め手になるやつが欲しい。ガツンと女心を掴むやつ」

他メーカーからシェアを奪う決め手。起爆剤となり得るもの……

あらゆる女性に「欲しい！」と思わせる商品が、今の赤坂堂には必要なのだ。

透真が頭を悩ませていると、突然ドアがコンコンとノックされた。

腕時計に視線を走らせれば、もう定時の十八時を過ぎたところだ。赤坂堂では残業を推奨していないし、今日は誰かと会う予定もない。緊急案件なら内線が先にかかってくるはずなのに。

「どうぞ」

声をかけるのとほぼ同時に開いたドアに目をやると、入ってきたのは赤坂堂の現社長。透真の父親でもある敬之だった。白髪のままじた髪をオールバックにした敬之は、化粧品メーカーの社長らしく清潔感にあふれている。顔立ちも整っているが、六十五歳の割には肌艶もいい。腹も出ていないけれど加齢臭など微塵もない。香るのは自社製品のフレグランスだ。フルオーダーのブランドスーツは似合すぎて嫌味もない。さしずめ歩くダンディズムと言ったところか。

「社長。どうされたんですか？」

椅子から立ち上がりつつ敬語で尋ねる。いくら親子といえどもここは会社。甘えた態度は許され

ない。が、敬之は直立する透真を右手でまあまあと制した。

「就業時間は過ぎた。親として、ちょっとおまえに話があつてな。なに、手間は取らせない」

父親の左手にある紙袋にチラリと目をやる。なにが入っているのかはわからないが、それにまつわる用件なのだろう。透真は既に実家を出て独り暮らしをしているし、敬之も忙しい身の上だ。プライベートで会おうとすると、お互いに都合をつけるという仰々しいものになってしまう。すぐに終わる用件なら、こうして就業時間後すぐに直接訪ねるほうが早いのだ。

促されるまま椅子に座りなおすと、敬之は持っていた紙袋を机の上にドサツと置いた。

「透真。今、お付き合いをしているお嬢さんはいるのか？」

いきなりだと思った。

「いや、そういう人はいないよ。今のところはね」

軽く答えながら、肩を疎める。「付き合っている人はいるのか」と聞かれた時点で、透真の勘が父親の用件を察知した。

「なに。結婚しろって？」

「話が早い」

そう言った父親は、紙袋の中からいかにもお見合い写真ですといった高級台紙を出して、透真に差し出してきた。

「おまえももう三十二だ。要領よくやっているようだが、そろそろ身を固める時期かと思つてな。

私が母さんと結婚したのも三十二だった」

差し出されたお見合い写真を受け取り、父親に向けた視線を、今度はさっきの紙袋にやる。まだ中に何部もの写真台紙が入っているようだ。

「私が見繕ったおまえの花嫁候補の写真だ。中に釣書も挟んである。みんなおまえ好みの美人だぞ」

(どうせ画像を加工してんだろ?)

と、内心毒づきながら、お見合い写真をペろつと開いてみる。

加工疑惑はさておいて、確かに美人だ。緑の木々が見える窓を背景に、袖がフリルになったワンピースを着た女性が、脚をクロスして写っている。モデル顔負けのポージングは「どう? 私、綺麗でしょ?」という自信のあらわれに見えた。

「ガキじゃないんだ。花嫁候補だなんて、こんなお膳立てしてもらわなかった方がいいんだけどな」
たった今開いたばかりのお見合い写真を閉じて、透真は小さく息を吐いた。

自分で言うのもなんだが、透真はモテる。父親譲りのこの整った顔立ちが女性に好かれるという自覚はあるし、加えて自分が赤坂堂の社長の息子であることも別段隠さないから、特定の相手は作らなくても女性に困ったことがないのだ。

「もちろん。無理にこの中から選べとは言わんさ。おまえが、この赤坂堂に恥ずかしくない花嫁を連れてきていればな。そうすれば、私がこんなお膳立てをしてやる必要もなかったのだがね?」

そう言った父親が、鼻で笑っている。それは、一夜の恋ばかりを繰り返す透真の日常を見透かしているようだ。

「あー、はい。わかった。あとで見とくよ」

自分の分が悪いことを感じて、早々に白旗を上げる。すると敬之が、バシッと左右から力強く肩を叩いてきた。

「会社のことをおまえが真剣に考えてくれているのはわかっている。同じくらい真剣に自分のことも考えろ。私からはそれだけだ」

「……………」

返す言葉が思いつかず、ダンディな後ろ姿が部屋を出ていくのを黙って見送る。

パターンとドアが閉まって、透真は小さく息を吐いた。椅子に身体を預け、天井を仰ぐ。

(結婚……結婚ねえ……)

男としては、不自由で窮屈なイメージがある。自分の自由がなくなると言えばいいか。とは言っても、透真は結婚否定主義者ではないし、「俺は絶対結婚しない」なんて言い張るつもりもない。いつかは結婚する 때가来るんだろう。だが、その不自由で窮屈な檻の中に、自分が喜んで入っていく様がいまいち想像できないだけだ。その一方で、父親の言わんとすることもわかる。

役職が上がれば、公式のパーティーなどに同伴するパートナー——つまり伴侶は必要不可欠だ。特に海外ではその風潮が顕著と言える。赤坂堂がこれから、海外にシェアを拡大していこうとするなら、海外の裕福層、投資家主宰のパーティーに出る機会も増えてくるだろう。後継者のことも考えなければいけない。だがそんなことを脇に置いたとしても、我が子によい伴侶と幸せな家庭を願う親心が自分の父親にあることも理解できる。

(俺ももう三十二だ。そろそろ腹を括れ、つてことか……)

父親から渡されたお見合い写真を、さつきとは違う気持ちで開く。

透真は写真ではなく、台紙に挟まれていた釣書に目をやった。

——西園寺優里亜。父親はコンビニ事業や総合スーパー事業を営む大手流通株式会社スリーセブンの代表取締役。三姉妹の末っ子。

三年前、スリーセブンと赤坂堂は事業提携を行った仲だ。赤坂堂が二十代前半の女性をターゲットに立ち上げたメイクブランドを、スリーセブンだけで販売するという独占契約で、そこそこまとまった利益を出している。西園寺優里亜が候補に挙がったのも、彼女の父親がスリーセブンの代表取締役だからだろう。ビジネス的な政略結婚が狙いなのはわかる。

(ああ。そう言えば、スリーセブンと業務提携したときのパーティーにいたな。そのときは大学生だったっけ……。ふーん)

なんとなく思い出しながら、釣書の続きを読んだ。

——現在は二十四歳。〇女子大学人間総合学部卒。趣味、スキー、テニス、ピアノ、バイオリン、旅行。特技、英会話。

「は？」

思わず声が出た。西園寺優里亜の釣書を頭からもう一度丁寧に読み直す。

(なんで職歴が書いてないんだ？　もしかして職歴がないのか？　働いたことがないのか？　そうなのか？　今まで一度も？)

そうとしか考えられない。透真はパタンと閉じた西園寺優里亜の写真と釣書を机に置いて、紙袋から別のお見合い写真を出した。そして、挟まれていた釣書に目を通す。

(ちよつと待て、こいつもか！　嘘だろ？)

開いて、閉じて、開いて、閉じて——そうして全てのお見合い写真と釣書をチェックした透真は、最後の写真を机に放り出して思わず叫んだ。

「こいつら全員ニートじゃねーか！」

ここにリストアップされた女性達は、生まれついてのお嬢様だ。父親が大手企業の代表取締役だったたり、銀行の総裁だったたり、テレビ局の重役だったたり。あくせく働く必要がないのだからうことは想像に易い。だからといって全員が全員、親の臍嚢りとは何事だ。美人なのは確かだが、言い換えると顔と親の肩書き以外になにもないじゃないか。

このお見合い写真の中から相手を選んで結婚すれば、赤坂堂にはなにがしかのメリットがある。しかし、透真個人にはデメリットしかないことは明らかだ。働きもせず、親の金で旅行だスキーだと好き勝手に遊び回ってきた女が、結婚した途端に良妻賢母になれるわけがない。金の出所が親から透真に変わるだけ。透真はATM兼アクセサリーだ。

「俺は働いている美人が好きなんだ！　美人でもニートはいやだつーの！　俺をナニと結婚させようってんだよ、親父！」

冗談じゃない！　今どき一度も働いたことのないニートが自分の伴侶だなんて！　本気で無理だ。仕事大好き人間の自分と、話どころか価値観さえも合うとは思えない。我が子に幸せな結婚をとい

う親心はどこにいったのだ、親父よ。

ドン引きした透真が顔を引き曇らせていると、ポロンとスマートフォンが鳴った。

(メール、か)

スマートフォンに届くメールは全てプライベートのものだ。業務用はパソコンで受信するようにしている。しかし今、プライベートで急いで確認しなくてはならないようなメールが来る予定はなかった。だが、この漣立つた心中を落ち着けるために少し別のことを考えようと、透真は広げたお見合い写真の山から、自分のスマートフォンを発掘した。

「ん？ なんだこれ？」

『あなたにピッタリなお相手が見つかりました』

そんなメールの件名を見て、スマートフォン片手に首を傾げる。

一瞬、新手のスパムかとも思ったのだが、透真は自分が受信許可したメールしか受信箱に入らない設定にしている。知らないアドレスから来たメールは、即迷惑メールフォルダ行きなのだ。だからこのメールは、透真が自分自身で受信を許可したアドレスから来たことになる。

送信元を確認しようと、透真は件名をタップしてメールを開いた。

『赤坂様。日頃より、結婚相談所のフタリエコネットをご愛顧いただき誠にありがとうございます
ます』

「結婚相談所？ 結婚相談って、ああ！ あれか！」

メールの冒頭を見た途端、すっかり忘れていた記憶が蘇る。

実は、透真の大学時代の同期が、数年前に事業を立ち上げたのだ。それがこの結婚相談所、フタリエコネット”。大学時代に学んだ統計学を活かして、独自のマッチングシステムを構築。最新のAIが登録会員の中からベストパートナーを紹介してくれるというものらしい。名前は、ふたりと、結びつけるという意味のコネクトを掛け合わせた造語なんだとか。

当時、事業を立ち上げたばかりだった同期と飲みに行ったときに、「会員数を少しでも増やしたいから協力してくれないか」と頼まれて、透真も登録していたのだった。

(もう何年前になるか？ ノリで登録したからすっかり忘れてたぜ)

忘却の彼方へと追いやっていたこの結婚相談所の名前を、透真はネットで軽く検索してみた。レビューをいくつか読んだが、なかなか評判がいいらしい。実店舗も少しずつ増えていて、今はスマートフォン用の専用アプリもあるとのこと。

(ふーん。やるねえ)

会員登録は実店舗のみで行い、独自の審査をクリアしなければ登録できない仕組みになっている。しかも、本人確認書類をはじめ、独自証明書やら卒業証明書、国家資格以上は資格証明書、おまけに収入や勤務先を証明するために、源泉徴収票や確定申告の控えも提出させられる。

提出書類が多ければ多いほど、結婚相談所としての信頼が増すのかどうかは不明だが、それらの書類は、会員登録している限り毎年更新する必要があるんだとか。

ただ、透真自身は更新手続きをしていないのだが――

『俺の年収なんて、毎年そんなに変わらないしな。て言うか、本当の額を書いたら、俺にマッチン

グする女が増えないか？ 嵩増し登録なのにそれじゃあ本末転倒だろ。逆サバしところ。仕事も普通の会社員にしてと。履歴書？ 俺が同じ大学出てるの、おまえが知ってるじゃないか。独身証明書もパスパス。え？ AIが顔面偏差値採点するから写真は絶対必要？ しょうがないなあ、んじゃ今スマホで撮れよ。写真館とかいいよ。俺イケメンだからスナップで。なに？ 他にも感覚テストとかあるのか？ それを受けたら、俺がどんなタイプの美人が好きとかもわかるわけ？ へえ、心理テストみたいなのやつか。それは面白そうだな。今スマホでできるのか？ んじゃ受けるよ。更新手続きをそっちでしてくれといったら、俺が結婚するまで会員登録していいぞ』

なーんて、同期と飲みながらノリで言った気がする。マッチングしてもらう気なんかさらさらなかったから、写真なんか変顔で登録したつけ。同期は会員登録数が増えた今も、透真の言葉通りに毎年更新していたようだ。なんとも涙ぐましい営業努力である。

（ああ、だんだん思い出してきた。酒の勢いって怖えーな）

若気の至りに自分で失笑しながら、透真はマッチングメールをスクロールした。本文中に記載されていたURLから、会員専用ページにログインする。表示されたページには、AIがマッチングしてくれた「赤坂透真様にピッタリなお相手」のプロフィールが表示されていた。

（H・Yさん？ この人が俺にピッタリな相手ねえ？ ふーん、二十九歳か。身長一五八センチ。体重四二キロ。会社員。あ、職業のカテゴリが研究者だ。女の実験者か！ リケジョだな、リケジョ。年収、五百万。へえ、うちの研究者と同じくらいか。分野はなんだろう？ 結構大手に勤めてそうだな。勤続二年……ああ、大学院を出てるのか。趣味、研究だって。はは！ 仕事が趣味な

タイプか？ 顔は見れないのか？ 顔）

イニシャルの横に、青背景にバストアップの証明写真風の画像が表示されるが、顔の中央がうつすらとぼかしてある。髪型や髪色、体型などの雰囲気はなんとなくわかるものの、それ以上に鮮明な写真を見ることはできない。なるほど、名前や勤め先、顔写真などの個人が特定できる要素には、フィルターがかかる安全仕様らしい。ここで相手のだいたいのプロフィールを確認して、お互いの興味を持った次のステップに進むわけか。

父親が持ってきた見合い写真と釣書よりも、明らかに熟読している自分に気が付いて、透真は取り繕うように軽く咳払いした。この部屋には自分しかいないのに。

ページの最下部にある、「H・Yさんに会ってみたいですか？」という問いを視界の端に入れたつ、このAIマッチングシステムの解説ページに飛んだ。

（まあ一応、どんなシステムか把握しときたいしな……俺とこの人がどういう基準でマッチングしたのか、とかさ）

自分で自分に言い訳しながら、ページを熟読する。

店舗で新規会員登録が完了すると、翌日からAIがマッチングを開始。希望の条件を合致させるだけでなく、ふたりの共通点などもマッチングポイントになるらしい。それは趣味だったり、思ってたたり、食の好みだったりといういるだ。他にも、お互いをうまく補完し合えるような組み合わせになることもあるんだとか。

マッチングすると、まず既会員にマッチングメールが届く。透真が受け取ったあの『あなたに

ピッタリなお相手が見つかりました』というメールだ。

既会員が先に大まかなプロフィールを閲覧。会ってみるかどうかの問いに、【はい】を選択すると、新会員にマッチングメールが届く。ちなみに、どちらかが会わない——【いいえ】を選択すると、AIが瞬時に好みを再学習して、同様の異性を紹介しないようにする仕組みだ。

AIは常に学習を続けているので、既会員同士のマッチングも行われ、最近では成婚カップル誕生数が二十%を超えているのだとか。ちょっと検索してみたところによると、大手の結婚相談所の成婚率がだいたい十%らしいので、ちょうど倍になる計算だ。

（へえ……そんなにいいのか、これ……）

「最先端AIマッチングシステムが、あなたを想い、助け、寄り添ってくれるベストパートナーをご紹介します」

ページに書かれたキャッチコピーがただの宣伝文句だとわかっているくせに、どこか心惹かれてる自分がいる。

登録するとき、どうして年収を逆サバしたり、役職を変えたり、適当な写真を送ったりした？どんな男よりも赤坂透真がいいと言ってくれる女性に出会いたかったからではないのか？あのときから自分は、運命の出会いを待っていたのかもしれない。

透真はページを戻って、紹介された女性の写真をもう一度眺めてみた。ぼかされた写真だが、痩せ型なのはわかる。髪色は黒。短いのか、結っているか……たぶん結っているのだろう。シンプルなお白い服を着ている。飾り気のない女性だ。これが——いや、この女性が、AIが導き出した自分

のベストパートナー。

——H・Yさんに会ってみたいですか？

（そりゃあ、まあ……）

こんなマッチングシステムでも利用しなければ、出会うこともない人だろう。

「ブタリエコネット」は同期が立ち上げた会社だ。怪しい出会い系のそれとは違うと頭ではわかっている。だが言葉にできない躊躇いがあるのも確かだ——なのに、迂闊な指先がスマートフォン画面にポンと触れて、【はい】のボタンを押してしまったのだ。

「あ」

しまった！と思ったときには既に画面が切り替わって、「H・Yさんにアポイントメールを送りました。返事があるまでしばらくお待ちください」と表示される。確認画面すら出ない。なんとこのスピードだ。

「んん〜。ま、いつか……」

詰めた息を吐いて、椅子に身体を預けた。

【はい】のボタンを押してしまったからと言って、必ず会えるとは限らない。相手の意思もある。

透真がノリで登録したあのプロフィールを見て「会いたい」と思う女性は相当のレアだ。実際、登録したのは数年前のはずだが、今日までマッチングメールが来なかったのがいい証拠。少なくとも父親が持ってきたお見合い写真のご令嬢とは真逆のタイプの女性だろう。

（ベストパートナーねえ……。そんな女が本当にいるなら……）

会ってみたい——それは透真の純粋な興味だった。



『あなたにピッタリなお相手が見つかりました』

仕事が終わって電車で揺られているとき、華子はこんなタイトルのメールを受信した。送信元は、昨日、本会員登録が完了した結婚相談所「ブタリエコネット」だ。

「うほー！」

電車の中なのに、興奮したオランウータンのような声が出てしまい、隣に座っていた人にゴヨツとされる。華子は「スママセン」と小さく頭を下げ、またスマートフォン画面を見つめて鼻息を荒くした。

（ほ、本当に来ました。すっごーい！ 思ったより早かったですねえ〜）

華子は誕生日に「ブタリエコネット」の店舗に向かったが、あの日はシステム説明と仮登録だけで終わってしまった。本登録に進むためには、様々な証明書が必要になる。それらの書類を揃えるのに二週間。それから審査に一週間。そして審査が通ったら、今度は自分のプロフィール作成と、感覚テストだ。

感覚テストは一般常識から道徳的思考、それからあらゆる人間の顔パターンを見せられて、その中から自分が「好ましい」と思ったものを選ぶ形式だった。受けた印象では、パーソナリティ理論

に基づいた一種の性格分析だと思う。潜在意識を探る感じだ。これを元にAIがマッチングを行うのだろうか。科学はここまで進歩したのか。

写真の提出も必須で、この提出された写真をAIが画像解析して、骨格から顔面偏差値採点を行うのだとか。科学はここまで進歩したのか。華子が駅前にある証明写真機で撮った正味九百円の写真を提出すると、「本当にこちらでよろしいんですか!？」と、担当者にも確認された。聞くとところによると、写真館でお見合い用の写真を撮影してもらい、それを登録する人が圧倒的に多いのだそうだ。九百円の証明写真——しかも、ひつつめに白無地のTシャツ、おまけにすっぴんの写真を提出してきた人間は今までひとりもいなかったと見える。だが華子にしてみれば、個人情報保護の観点からぼかしが入るとわかっている写真に、わざわざ気合いを入れる意味がわからない。どうせ見るのはAIだけだ。AIの画像判定に影響するのは解像度のみで、どんな髪型だろうがメイクだろうが背景だろうが関係ない。あれやこれや言うのは人間の感性だ。

（どれどれ？ どんな方をご紹介いただきたいんでしょう？）

最先端のAIがもたらす情報に、華子は興味津々だ。

華子は早速、本登録時にインストールした「ブタリエコネット」専用アプリを立ち上げた。

（なにになに？ イニシャルT・A氏。三十二歳。身長一八二センチ。体重七二キロ。会社員。職業カテゴリーはサービス業。年収三百万円。勤続十年。最終学歴、K大経済学部。趣味は仕事。——うん、超普通ですね！）

お相手のプロフィールを読み上げて、心の中で頷く。

華子が相手に求めるものはそう多くない。容姿や年収、学歴なんかは気にしないし、結婚しても華子が研究が続けることに賛成してくればそれでいい。あとは、つつい食べることを疎かにしてしまう華子の面倒を見てくれたら大変有り難い。

プロフィールを全部読むと、ページの最下部に、「T・Aさんに会ってみたいですか？」という問いが出てくる。せっかく結婚相談所に登録したのだ、【はい】以外の選択肢なんて存在しない。むしろ、【いいえ】を選択する意味がわからない。

華子が迷わず【はい】のボタンを押すと、ページが変わってカレンダーが表示される。このページで、会うのに都合のよい日時を登録するらしい。

初めて会うときは、あまり気合いの入った店だと緊張するので、カジュアルな店がいらいが恋愛慣れしていない登録者がそんな都合のいい店を知っているわけがないことも、我らが親愛なるフタリエコネットは織り込み済みだ。ふたりの勤務地や自宅から無理なく行くことができるレストランや喫茶店といった食事処を、AIが待ち合わせ場所としてリストアップし、予約代行までしてくれる。まさに至れり尽くせり、フタリエコネット様様である。

（登録以外は全部アプリ上で完結するなんてすごいですねえ。じゃあ、会う日を決めないと……）とりあえず今は自分が主体で進めている研究はないし、再再提出した次世代型ハイドロキノンαのプレゼン資料の結果も戻って来ていない。残業することもないと踏んだ華子は、平日日中以外は毎日あいていると解答した。店も、リストアップされた全ての店舗にOKを出した。

（これだけ対面可能日に設定すれば、どこか一日くらい合うでしょう）

あとは相手の返事を待てばいい。相手に本当に会う意思があるのなら、日程もサクッと決まるだろう。そう予想した途端、アプリから通知が来て、お相手と対面する日が今週金曜の夜に決まった。場所は、職場の最寄り駅付近にあるレストランだ。徒歩十五分ほどで着く距離である。

当日、待ち合わせ場所に着いたら、アプリにある到着ボタンを押すことで相手に連絡することができる仕様らしい。すれ違いを防ぐために当日になるとチャット機能も解禁される。ただし、連絡なしのドタキャンはフタリエコネットの本部に連絡が行き、一発退会処分となる。厳しいが、この厳しさがフタリエコネットの人気の秘密だ。

（仕事が速いですね、T・A氏。好感度高いです。うちの商品開発部も見習えこの野郎です）

もう三週間も待たされている次世代型ハイドロキノンαの件と比較せずにはおれない。画面の向こう側で、T・A氏なる人物が自分に会おうと予定を入れてくれたのだと思うと、妙な高揚感を覚える。しかもこれはデートだ。確認のためにネットでデートの意味を調べてみると、日時や場所を定めて男女が会うこと、とある。ほら！ やっぱりデートだ！

人生初のデートの約束に、華子はホクホク顔で電車を降りた。

◆ ◆ ◆
「山田女史、どうされました！ 今日はいよいよ格好ではありませんか！」

出社した華子を出迎えたのは、同僚、阿久津の驚いた声だ。阿久津が突然大声を出すものだから、皆の視線が一気に華子に集中する。

珍しいと言っても、華子が着ているのは、就職活動に使っていた一般的な黒のリクルートスーツである。しかしこのリクルートスーツこそが、華子が持っている服の中で、最も値の張る文字通りの一張羅だ。

今日は金曜日。待ちに待ったT・A氏との対面日である。

初デートでTシャツにジーンズはさすがにラフすぎて失礼であろうと考えた華子は、熟考の末にリクルートスーツを引っ張り出してきたのだ。鞆も革製に変え、髪もゴムではなくバレッタでとめた。足元もパンプス。顔にはルースパウダーも叩いた。華子最大級のお洒落である。

自分のお洒落に気付いてもらえたのが、ちよつと照れくさい。仕事帰りに男と会うなんて、めちゃくちゃO.Lっぽいではないか。華子は上に羽織った白衣のポケットに両手を突っ込むと、「えへへ……」はにかんだ笑みを浮かべた。

「もしや、転職——」

「違います」

予想だにしていなかった阿久津からの質問に、サツと笑みを消して真顔で答える。華子がデートに行くなんて、他の研究員は考えもしないのだ。そもそも華子に転職の意思はない。なにせ華子には次世代型ハイドロキノンαがある。

(わたしの次世代型ハイドロキノンαちゃんを活かさないと、会社の、いえ社会的な損失です。

商品開発部もそれぐらいわかるでしょう。果報は寝て待てと言いますからね。わたしはじつくり待ちますよ)

華子はパソコンに接続された蛍光実体顕微鏡の前に座った。

華子が今手伝っているのは、畠山所長が中心となって進めている、ガラスファイバーを配合したマスカラの再開発だ。既に製品化されているのだが、商品開発部から「洗顔時に落ちにくいのをどうにか改良してほしい」とリニユールを依頼された物である。

(だったらコーティング剤の成分を改良したほうが早いような気がしますけど……)

そんなことを考えながら、新開発のマスカラの上に、赤坂堂が発売しているメイク落としを各種垂らして、どの商品でどうなるかを顕微鏡で観察する。地味だが、現状の把握のためには大切な作業だ。

黙々と……ひたすら黙々と顕微鏡を覗く。そうしているとあつという間にランチタイムだ。

「山田さん。お昼だよ。もう皆行ってるし、僕らも行こうか」

「あ、はい！」

所長の声を上げる。いけない、いけない。ちゃんとご飯を食べなくては。

(では、メールチェックしてからご飯にしましょう)

こういうことをするから、つつい食いつぶぐれる。それはわかっているけれども、華子はいつもの習慣でメールボックスを開いた。

『次世代型ハイドロキノンαについて』

そんな件名のメールが受信箱に入っている。受信時間はついさっきだ。きっと商品開発部からの返事に違いない。

待ちに待った連絡を、華子にはやる気持ちを抑えきれずに開いた。

『提出いただきました次世代型ハイドロキノンの詳細を拝見しました。その有効成分の効果効能は認めますが、開発方針から今回は採用見送りと致します』

「……採用見送りって……はいい!?」

淡泊すぎるメールの前に、目を見開いて驚愕する。ランチに行こうとしていた所長も足をとめてこちらを見ていた。吉報と信じてやまなかった知らせなのに、見送りだなんて信じられない。商品開発部はしつかり検討し直してくれたのだろうか？ 検討し直してこの結果なのか。本当に？

華子はパッと電話を取ると、商品開発部の担当者に内線かけた。

「もしもし！ 研究所の山田です。次世代型ハイドロキノンの件で確認したいことがあるのですが、担当者さんは——あ、はい……はい……ではお戻りになったら——え、そうなんですか？ はい……わかりました……では後日改めて……」

電話を切ってドサツと椅子に崩れ落ちる。近付いてきた所長が、おずおずと聞いてきた。

「開発部はなんて？」

「採用見送りだそうです。担当者に電話したのですが、今は昼休憩だと。折り返しの連絡を頼もうとしたんですが、今日は午後から会議があるから来週にしてほしいと言われて……」

「あ……それはあ……」

逃げられた——それぐらい、華子にもわかる。おそらく来週電話しても担当者は出ない。直接出向いても離席しているか、他の用事があるからと邪険にされてしまうだろう。採用できない理由を教えてもらえれば改良の余地もあるのに、商品開発部は華子を相手にする気はまるでないのだ。

「よくあること。よくあること！ 僕らの仕事は会社の手数を増やすこと。増やした手数をいつ、なにで、どう使うかを決めるのは商品開発部。それぞれの領分があるんだから」

察した所長が宥めるように、優しく諭してくれる。

「……………はい」

そう返事をするものの、悔しさとやり切れなさが胸に込み上げてきた。行き場をなくした感情が、身体の中に澱のように蓄積するのだ。

「所長、お昼に行ってください。わたしはちよつと食欲がなくなってしまったので……」

華子がそう言うと、所長は少し眉を下げた。

「そうかい？ じゃあ、そうさせてもらうけど、あまり思い詰めないことだよ」

ぎこちなく微笑んで頷いてみせる。

所長が食事に出て、研究所にひとりになった華子は、握りしめた拳を小さく机に叩きつけた。

（有効打がありながら使わないだなんて、怠慢以外のなにものでもないですっ！ 仕事しやがれっんですよ！ おたんこなす！ だからいつまで経っても赤坂堂は二位なんですよ！）

腐るつもりはないが腹は立つ。真剣に取り組んでいたから尚更だ。

華子は胸中でひとしきり毒づいて、椅子の背凭れに身体を預けた。そして、天井を仰ぎながら

そつと目を閉じる。いつか所長と阿久津に言われた言葉を思い出していた。

これは洗礼なのだ。仕方のないことなのだ。諦めるしかないのだと……

だが諦めるなんてことは、華子のポリシーに反する！

（ふんだ！ 誰が諦めるもんですか。見てるがいいです。なにがなんでも商品化してみせます。商品開発部め、次世代型ハイドロキノンαちゃんの前ひれ伏すがいいです!!）

逆境こそチャンスなり。具体的なアイディアはまだないが、せっかく生み出した最高傑作をお蔵入りになどしてたまるものか。華子は鼻息を荒くすると、机の引き出しにストックしていたブドウ糖入りゼリー飲料を取り出して、チューツと一気飲みした。



（や、やばいです！ ピンチです！ 初デートなのに遅刻です！）

華子はスマートフォン片手に全力疾走しながら、待ち合わせのレストランへと向かった。

現在時刻は十八時五十九分二十秒。T・A氏との待ち合わせ時間の十九時まであと四十秒しかない。次世代型ハイドロキノンαをどうやって救うかを考えることに夢中になって、会社を出たのが定時を四十五分も過ぎてからだったのだ。十五分で着く距離だと思つて油断しすぎた。本当はもっと早く会社を出るつもりだったのに。

アプリの通知によると、T・A氏はもう待ち合わせの場所に着いている。しかも約束時間の十分

前にだ。氏には、本日解禁されたチャット機能で、「やや遅れるかもしれませんが」と念のために断りを入れてはいるものの、だからといつてのんびりはしてられない。

（パ、パンプス……走りにくい……）

普段穿き慣れたジーンズとスニーカーが恋しい。

約束の時間を一分過ぎて、汗を垂らしながら待ち合わせのレストラン前に到着した。

辺りを見回すと、入り口から少し離れた道路脇に、スーツ姿の男の人がひとり立っているのが目に入る。道行く人はたくさんいるが、立ち止まっている人は他にいないし、おそらくあの人が件のT・A氏だろう。そう当たりを付けた華子は思い切つて近付いた。

「あ、あの……はあはあ……フタ、フタリエコネ、ツトの……はあはあ……えつと……」

呼吸はめちやくちや、汗はダラダラ、単語はカミカミだ。この人がT・A氏じゃなかったらどうしようという不安と、待たせてしまった申し訳なきがごちゃまぜだ。かなりいっぱいいっぱい、華子は今自分がどんな状態で、この人にどんなふうに見られているかなんてまったく考えもしなかった。

「……………君が、H・Y、さん？」

たつぷりと間を置いた彼の視線が、華子の頭の天辺からつま先までを移動する。どうやら人違いではなかったようだ。身長一八二センチのプロフィールの通り、背が高い。スーツ姿のせいかもしれないが、がっちりしたその体格は、研究所で見慣れた男性同僚らとはまるで違う。

華子は手にしていたスマートフォンからフタリエコネットの専用アプリを開いて、証明するよう

に自分のプロフィールページを見せた。

「は、はい！ 山田華子と申します！ 初めまして！」

意識して元気な声を出す。ついでにニコッと笑うと、T・A氏の口角がピクッと引き曇ったように上がった。

「……ど、どうも……」

相手は言葉少なだ。もしかして、おとなしい人なんだろうか。だとすると、結婚相談所を利用するのも納得だが。

（それとも怒ってるんでしょうか？ 一分二十秒くらい遅れてしまいましたし）

「あの、すみません。お待たせしてしまって……」

ぺこりと頭を下げる。氏は表情ひとつ変えずに、「いえ」と言った。

「仕事は大丈夫？」

「ええ、それは、はい。大丈夫です」

おそらく氏は、華子の仕事が長引いて時間に遅れたのだと思っただろう。そんな人に、仕事自体は定時で終わっていたのだとはとても言えない。眼鏡の奥で、微妙に視線が泳いでしまう。

「……じゃあ、入ろうか」

「そ、そうですね」

T・A氏が木製のドアを引くと、カランカランとドアベルの音がする。「どうぞ」と先に促されて、華子は店内に入った。

（初めてレディファーストされちゃいました。この人は紳士な人ですねえ）

「いらつしやいませ。二名様ですか？」

「七時に予約していた者です」

出迎えてくれた女性店員に、氏がスマートフォンから予約番号を見せている。

華子は初めて来たのだが、ここはハンバーグ・ステーキ専門店らしい。個人経営で、レンガ造りの壁にどこかほっこりした雰囲気を感じる。「夜バルはじめました」と、手書きの看板があった。

店員に案内された奥のテーブル席に向かい合って座ると、お冷やおしぼりが二つずつ、メニューが一冊、テーブルに置かれた。

この一冊のメニューというのは微妙に困る。独り占めするわけにもいかないし、かと言って、初対面の人と一緒に顔を突き合わせて見るのも気が引ける。恋愛力というか、コミュニケーション能力に長けた人なら困りもしないのだろうか……

「山田さんは、ここに来たことはある？」

急に話しかけられて慌てて顔を正面に戻すと、T・A氏がメニューを広げている。

「えっと……ないです。初めてです」

「俺は何度か来たことがあるよ。この黒毛和牛一〇〇%ハンバーグセットが、この店の名物。ソースもオリジナルだね。結構うまい」

氏の気さくな口調に、おとなしいという第一印象はすぐに消え失せる。かなりコミュニケーション能力の高い人らしい。爽やかと言うんだろうか。華子がメニューを見やすいように向きを変えて

くれたりと、気遣いも見える。

そんな人だから、少し落ち着きを取り戻した華子は勧められるがままに頷いた。

「そ、そうなんです。じゃあ、それにします」

食べ物なんてなんでもいい。好き嫌いはないし、こだわりもない。口に入る物はなんでも栄養だ。「俺も同じのにしようかな」

注文が終わって店員が去ると、T・A氏はジャケットを脱ぎながら話しだした。

「あー。なにを話せばいいのか。俺、今回初めて結婚相談所を利用したから、こういうの慣れてないんだ。やっぱり最初は自己紹介かな？」

「自己紹介！」

華子はその単語に敏感に反応すると、すぐさま鞆からA4サイズの茶封筒を出して、それを氏に差し出した。

「……これは？」

不思議な表情を向けられる。一応、笑ってはいるが、驚いているようでもあり、警戒しているようでもある。そんな彼に、華子は自信満々に胸を張った。

「わたしの履歴書です。自己紹介ならこれが一番効率的かと思ひまして」

フタリエコネットの自己紹介ページはかなり簡易的だ。名前や勤め先など、個人情報にかかるところはすべてぼかされている。というのも、対面して信頼できそうな相手だと判断できたら、自分で名乗ったり勤め先を教えたりすることになっているからだ。つまり、実際に会ってみて「なん

か違う」「この人へんだわ」と思ったら、個人情報は何にも教えずに「さようなら」することもできる。

だが華子にそんなつもりはなかった。せつかく結婚相談所に登録してまで、最先端のAIに「相性がいい」相手を紹介してもらったのだ。相手からお断りされるのは仕方ないとしても、自分から断るのはなんかもつたいではないか。

今回のデータの目的は、お互いを知ること。隠し事をするメリットはゼロだ。自分の情報を開示せずに相手のことだけを知ろうなんて虫がよすぎる。——そう結論付けた華子は、みっちり書き込んだ履歴書を持参していた。

「そ、そう？　じゃあ、読ませてもらうかな」

氏は封筒から履歴書を出して紙面に目を走らせている。その間、華子は手持ち無沙汰だ。

（緊張しますね。就職活動の面接を思い出します）

まあ、就活も婚活も似たようなものだろう。まずは条件が合うか合わないかだ。履歴書の本人希望欄にはしっかりと「結婚しても研究を続けたいです」と書いておいた。これが一番大事だ。

ところどころさつきから、どこからともなくチラチラと視線を感じる。なんだろうと思って見ると、二つ横の席に座っている二人組の女性客が、T・A氏を見て「かつこいいね」と囁いているのが聞こえた。今度は反対側を見ると、オーダーを取ってくれたさつきの店員が氏の横顔に熱い視線を送っている。この店は店員もお客も女性のほうが多いようだが、そのほとんどの視線がT・A氏へと向いている。ひとりの人が視線を向ける時間は短いのだが、交互に絶えず誰かが氏を見ている

ので、氏の目の前に座っている華子もその視線の余波に晒されることになるわけか。

(なるほど！ この人はかっこいいんですね！ ホモ・サピエンス的に！)

周りの女性の反応に確信を持つ。履歴書を読むT・A氏の顔をまじまじと見ると、確かに整った顔立ちだ。

(ホモ・サピエンスは、左右対称の顔立ちを遺伝子的に健康状態が良好だから好むという説が以前ありましたが、最近では左右対称顔のほうが、脳が知覚的な処理がしやすいために選ばれやすい、という説に変わりつつあるようですね。イケメンは、個体認識するのに脳のリソースを割く割合が少なくて済むから好まれている……言い換えると、単純造形ですつと見ても疲れない顔ということでしょうか？)

『彼氏が超イケメンなんだけど、ムカついてもあの顔を見るだけで落ち着くの。まあ、いいかつて気分になる』と、大学時代に同級生が話していたのを聞いたことがある。そのような現象も、左右対称の単純顔が脳に与える影響と考えると面白いかもしれない。

(まあ、わたしには、よくわかりませんがね)

ひどい乱視と近視で、華子の視界は眼鏡越しにも歪んでいる。そこに脳味噌補正までも自動で加わっているのだから、視覚情報など当てにはならない。人間の脳皮質の三割が視覚に関連したものなのに、脳が度々錯覚を起こすことはよく知られている。時には二次元と三次元の区別さえつかない。騙し絵なんて最たるものだ。人間は、見たいものを主観と希望と憶測と、更には自己解釈まで交えて、見たいように見る。つまり、人間の脳は「高度なアホ」という矛盾を抱えているのだ。

華子がそんなことを考えていると、T・A氏が「ああ」と声を漏らした。

「君はうちの研究員か」

「え？」

理解が追いつかずに、きょとんとして聞き返す。氏は華子の履歴書をテーブルに置いて、脱いだジャケットの内ポケットから革製の名刺入れを取り出した。

「自己紹介、俺の番だね。履歴書はないが——はい、名刺」

差し出された名刺を受け取りマジマジと見つめる。見慣れた赤坂堂のロゴマークの横には、仰々しい役職名が書いてあった。

「赤坂堂の執行役員兼、チーフ・ストラテジー・オフィサーの赤坂透真です」

「えっ！ 同じ会社ですか!？」

これには華子もさすがに驚いた。眼鏡の奥で思いっきり目を見開いて、名刺とホモ・サピエンス的に好ましいらしい彼の顔を交互に見つめる。本当に左右対称顔だ。

「や、役員さん……なんですか？」

「ついでに言うと、赤坂社長の長男ね。俺の顔、社内報で見たことないか？ ちょいちょい載ってるんだけど」

爽やかに微笑む左右対称顔を見ながら、華子は「ははは」と誤魔化し笑いを浮かべた。

(ないですね……)

華子は社内報に微塵も興味がない。人事異動や商品売り上げ、表彰などが書かれた社内報より、

尊敬する高分子化学の教授が書いた論文を読むほうが好きなのだ。でも、この人が言うことが本当なら、自社の上役が——社長の息子が自分の目の前にいることになる！ なんと偶然！ なんとこの幸運！ このチャンスを逃す手はない！

可愛い可愛い次世代型ハイドロキノンαちゃんのため、華子は目をキラつかせながら身を乗り出した。

「赤坂堂美容科学研究所所属研究員、山田華子です！ わたしが開発した次世代型ハイドロキノンαちゃんについて直訴します！」

「は？」

綺麗な左右対称顔が、華子を見上げてぼかんと呆気にと取られている。そんなことはお構いなしに、華子は自分の最高傑作がいかに優れているかを延々と語りはじめたのだった。



「——従来のハイドロキノンは、作用が強すぎて副作用が起きやすい成分であったことはご存知の通りだと思います。そこで赤坂堂ではハイドロキノンにブドウ糖を結合したα-アルブチンを、ハイドロキノン誘導体として使用してきました。これは安全性はピカイチですが、効果のほどはやはり本物のハイドロキノンと比べると劣ります。そこで次世代型ハイドロキノンαちゃんでは、アルブチンのチロシナーゼの働きを阻害してメラニンの生成を抑制する効果はそのままに——」

早口で延々と講釈を垂れ流し、身振り手振りを交えながら、時にはペーパーナプキンに構造式を書いてみせるリケジョを前に、透真は笑いを堪えるのに必死だった。

（直訴……直訴……。しかもなんで成分の名前に「ちゃん」付け……）

自然と肩が揺れる。

——失敗した。

待ち合わせの場所に走ってきた彼女を見たときの、透真の正直な感想がそれだった。

量産品のリクルートスーツに、黒髪のひとつめ。化粧に至っては、一応パウダーを叩いてはいるようだが、すっぴん風メイクを通り越したほぼすっぴん。そして極め付けは瓶底丸眼鏡だ。正直、めっちゃくちゃ地味な上にダサすぎて直視に堪えない。

（ちよつと待てよ！ 俺は美人が好きなんだが？ そうなのが心理テストでわかるんじゃないか？ たのか!? こんな地味女、完全に俺の範疇外だぞ！ ひ、人違い！ そうだ、人違——）

「山田華子と申します！ 初めまして！」

結婚相談所の自己紹介ページを片手にニコツと微笑まれて、素直な表情筋が引き撃る。

ガツデム……これで人違いの線は完全に潰れた。彼女こと山田華子が、朝からワクワクしながら店の中にも入らずに待ち続けたH・Yさん。

飾り気がないのはあの臆気な写真からも伝わってきたが、これは飾り気なさすぎるだろう。自分を少しでもよく見せようという気が微塵も伝わってこないことが、透真は堪えられないのだ。

赤坂透真、三十二歳。美人が好みだと言つて憚らない男である。

美人が好きでなが悪い。その分、自分の顔に自信はあるし、スタイル維持の努力だとしていい。なにせ、『美はつくれる』が社訓の、赤坂堂の経営者一族だ。美とは努力の結晶なのだ。

ガツカリなのは本心だが、それでも店は予約しているし、相手の顔を見るなり「用事ができた」と言つてとんずらするわけにもいかないだろう。どんな瓶底丸眼鏡の地味女でも女は女だ。いやな気分が帰ってほしくないというホスト精神が働くのは、女性相手の商売を生業なりわいとしている人間の性さがかもしれない。

とりあえず、店に入って腰を落ち着ける。どんなアルゴリズムでこの瓶底丸眼鏡と俺をマッチングさせたんだと、今度同期を問い詰めてやろうと決意しつつ、料理を注文した。

料理が来るまで自己紹介でもするかと話をふつたら、あろうことか山田華子は履歴書を提出してきたのだ！ 婚活に就活用の履歴書を持つてくるのは普通なのか？ それとも自己PRのつもりか？ 女性が会つて間もない男に自分の詳細を書いた履歴書をホイホイ渡すなど、不用心ぶようじん過ぎて逆にドン引きである。警戒心というものはないのか？ とは思いつつも、努めて顔には出さずに履歴書に目を通す。すると彼女の職場は、赤坂堂だと書いてあるではないか！

(ええっ!? マッチングポイントそこ？ そのなかか!?)

まさかの共通点である。もつと他に運命的なマッチングポイントはなかったのか。最先端とは言つても所詮しよせんはAIなのかと落胆らくたんが隠せない。

研究所は本社の敷地内にあるが、完全に別棟なので行き来はほぼない。まだ本名を名乗っていないし、透真が自社の役員だということに彼女が気付いているようにも見えないが、あとから気付か

れるのも、それはそれで面倒だ。

(つてか、自社の社員は無理とか理由を付けて、二度目は会わない話に持つていったほうが無難ぶなんか?)

うまい断り方が見つかつてよかったじゃないかと思いつつ、名刺を渡して自己紹介をすると、彼女の目の色が露骨ろこつに変わった。透真が自社の役員で、社長の息子だと知った途端とたん、あの瓶底丸眼鏡の奥で目がくわつと見開いたのだ。

(あ、なんだ。こいつもか)

透真が繰り返した出会いと別れの数は、赤坂堂の社長の息子という透真の肩書きや年収、そしてこの顔に釣られて寄つてきた女の数と、そのまま一致する。

女受けのいいこの外見と、赤坂堂の社長の息子という肩書きは、最強のリトマス試験紙だ。どいつもこいつも目の色を変えて媚こぼを売つてくる。透真ではなく、『赤坂透真』というアクセサリーに付随ふずいしてくる金が目当てなのがあらさますぎて、滑稽こっけいで嗤わらえるのだ。そして、目の前の彼女の反応に、どこか裏切られたような気持ちになる自分も。

誰も透真しゆんを見てはくれない——透真のそんな仄暗ほのぐらい感情も、彼女のひと声で一気に吹っ飛んだ。

「赤坂堂美容科学研究所所属研究員、山田華子です！ わたしが開発した次世代型ハイドロキノンαちゃんについて直訴じきそします！」

「は??」

素で面喰めんくらう。

今は仕事ではない、結婚相談所の紹介による顔合わせの席だ。なのに、彼女がはじめたのは、仕事のプレゼンである。仕事熱心なところは素直に好ましいと思うが、本来なら自己PRをするべき場で、自分が作った有効成分のPRをしているのだから、ちよつとどころかだいぶおかしい。普通じゃ考えられない。

(と言うかこいつ、俺の顔を見てもろくに反応しないんだよなあ……)

この店に入る前も入ってからでも、透真は周囲の女性達からちらちらと視線を向けられていた。中には露骨に秋波を送ってくる者もいる。それが透真の日常だ。ちよつと微笑んでやれば、女は誰もが頬を赤らめる。

試しにニコツと微笑んでみると――

「臨床結果も揃っていますし、実用には充分耐えうる品質を確保していると自負しています！保水力もですね、赤坂堂がラインナップしている三万円台の高級化粧品シリーズの三・二五倍です。使った肌が本当に違うんです。この保水力にも次世代型ハイドロキノンαちゃんが作用しています、この〴〵次世代型」というのがですね、水にも油にも溶けて――」

これである。清々しいほどの完全スルーだ。

こんな反応をされたのは生まれて初めてのこと、思わず笑ってしまう。

彼女は自分の容姿にも無頓着のようだが、男の容姿にも無頓着なのだろう。今まで透真の周りにはいなかったタイプだ。

「あとですね、この化粧水は主成分が水ではありません。もう、主成分が水の時代は古いと――」

「ストップ、ストップ、ストップ。ちよつと待つて」

何時間でも続きそうな講釈を押しとどめるように、透真は彼女の話の話を遮った。その上で、冷静に突っ込ませてもらう。

「君がうちの研究員だというのはわかったが、今は開発品ではなく、君自身のプレゼンをする場じゃないのか？ 一応俺達は今、結婚相談所の紹介で会っていて、仕事中心じゃない。あと、仮にも開発品だ。誰が聞いているかもわからない社外でプレゼンするのはやめようか」

「あつー！」

自分がだいたいズレていたことに華子はようやく気が付いたらしい。しゅんと肩を落として俯いた。

「す、すみません……わたし……あの……」

「以後気を付けて」

「は、はい……本当にごめんなさい」

声が震えている。

(ちよつと言いつつすぎたか?)

おそらく彼女は非常に真面目な性格なのだろう。プレゼンから仕事熱心なものも伝わってくるし、なにより履歴書の本人希望欄に「結婚しても研究を続けたいです」と書いてある。

(仕事が好きなのも、俺との共通点、か?)

彼女が作った化粧品を、透真が売る――そう考えると、確かにベストパートナーと言えないこともないかもしれない。多少、奇っ怪な行動も目に付くが、今のところ仕事熱心のひとりでカバーで

きなくもない……かもしれない。透真の年取や肩書きに釣られない女性という条件は満たしている。AIもAIなりに仕事をしていたということか。

(なるほどね。ベストパートナー……。これで美人だったら俺好みの女性ってことになるのか。まあ、見た目はちよつとアレだけど、女は磨けばどうにでもなるしなあ。あのダサイ眼鏡外して、髪型と服を変えてみたら案外イケたりするか……?)

まさに、「美はつくれる」である。そんなことを考えながら、透真は恐縮しきっている彼女を見つめた。

「怒っていないからそう落ち込まないでくれ。君の話は興味深かったよ。商品開発部にも、再検討するように俺から言っておく」

「あ、はい。ありがとうございます！」

華子に笑顔が戻ると、ちょうど店員が料理を運んできた。熱々の鉄板を銀色の蓋が覆っている。

これを目の前で取って、仕上げにオリジナルソースをかけてくれるのだ。

「お熱いのでお気を付けてください。では、開けますね」

店員が二個同時に蓋を取る。すると、もわっと白い湯気とジューシーな香りが立ち上がり、そこにこの店自慢のオリジナルソースがかけられた。中に肉汁をたっぷり詰め込んだハンバーグは、しずる感たっぷり。じゅわっじゅわっつと焼けた鉄板が唸り、食欲をそそる。

透真は早速、カトラリーセットから自分の分のフォークとナイフを取った。

「旨そうだ。さ、食べようか」

「あ、先に召し上がってください。わたし、眼鏡が曇って……」

「ははは。湯気凄かったもんな。じゃあ、お先につて……」

話し終えるのと同時に、透真は目をくわつと見開いた。なんと、絶世の美女が目の前にいたのだ。ファンデーションを付けていなくても真っ白な肌は、ぷつりぷりのもっちりもちで透明感がある。アーモンド形の切れ長の目はわずかに伏せられ、今は長い睫毛が影を作っている。アイラインどころかマスカラも塗っていないその目元は、彼女の美貌が天性のものだという証明だ。すつと線を引いたような鼻筋に、小振りで愛らしい唇は自然な色味。改めて見れば、髪の毛なんか天使の輪がでさるほどツヤツヤではないか。

顔立ちも相当整っているが、女らしく手入れが行き届いているところがまた驚きだ。化粧品メーカーの人間だからこそわかる。これは一朝一夕でできるものじゃない。普段から手入れをちゃんとしている証拠だ。

どこから来た？ この美女はいつたどこから来たのだ？ ついさつきまで目の前にいたのは、量産品のリクルートスーツを着た瓶底丸眼鏡の一風変わったリケジョだったのに！

驚愕に固まる透真は、目の前の美女から目が離せない。そして気付いてしまった。彼女が着ているのは、量産品のリクルートスーツ。ひつつめ髪。そしてあろうことか彼女は、構造式が書き散らかされたペーパーナプキンで、あの印象的な瓶底丸眼鏡を拭いているではないか――

「嘘だろ……」

呟いた透真の両手から、フォークとナイフがスッコーンと落ちる。彼女は眼鏡を拭く手をとめて、

顔を上げた。

「なにか落ちませんでした？」

「い、いや……大丈夫」

「？」

きよんとした彼女が真つ直ぐに視線を向けてくる。さつきより大きく見える目は、綺麗な二重まぶたで縁取られている。束ね損ねた横髪がサラツと額を流れただけで、その色つぼさに本気でゾクとした。

眼鏡を外して、髪型と服を変えてみたら案外いけるんじゃないかと思っていたが、ここまでとは思わなかった。超絶地味女が瓶底丸眼鏡を取ったら超絶美女だなんて、こんなことがあつていいのか!? 一八〇度印象が変わりすぎだろう! だが、めちゃくちゃ好みだ。ドストライクである。

「ブタリエコネット」の最先端AIは、十二分に仕事をしていたのだ。

彼女はきつと仕事を辞めない。最前線で働き続けようとするだろう。彼女の一生懸命さは今見ただばかりだ。彼女の研究が赤坂堂の明日を——透真を支えてくれることになるかもしれない。

(仕事熱心で、美人で、俺の収入も肩書きも気にしない女。俺の——)

「最先端AIマッチングシステムが、あなたを想い、助け、寄り添ってくれるベストパートナーをご紹介します」

あの煽り文句が脳裏をよぎる。

「……………」

なにも言わない透真を前に不思議そうな顔をしながら、彼女はすちゃっと眼鏡をかけた。すると夢から覚めたように、彼女が元の瓶底丸眼鏡に戻る。間違いなく同一人物のようだ。まだ脳が混乱しているが、目の前の出来事が真実だ。眼鏡を取った彼女は超絶美人なのだ。

透真が自分の年収を逆サバしたり役職を偽ったりしたのと同じように、もしかするとこのダサイ瓶底丸眼鏡と洒落つ気のなさは、彼女の防御なのかもしれない。ナンパや痴漢被害に遭わないようにとか、そんなやむにやまれぬ理由があるんだろう。いや、きつとそうだ。そうに違いない。絶世の美女が、好き好んでこんなダサイ格好をすることは思えない。

しかも、彼女が開発したと言っている有効成分は話に聞く限りはとても画期的なもののようにだ。化粧水なら利率も大きい。透真が望んでいた「他メーカーからシェアを奪う決め手」になり得るかもしれないではないか。知りたい。もっと彼女のことが知りたい。

「山田華子さん、だったね。さっきの君のプレゼンを聞いた限りでは、次世代型ハイドロキノンαというのとても素晴らしい有効成分に思えた。今度、研究所に行くから、そのときにでも詳しく話を聞かせてくれないか」

「本当ですか!? ありがとうございます! ぜひ!」

華子は声をワントーン明るくしてニコツと笑う。その微笑みは、眼鏡があつても大輪の華のように眩しかった。